平成２８年１０月２１日

平成２８年度病害虫発生予察特殊報（第２号）

和歌山県農作物病害虫防除所

１．病害虫名：アシビロヘリカメムシ　*Leptoglossus australis*（Fabricius）

２．作 物 名：ニガウリ

３．発生地域：田辺市、東牟婁郡串本町

４．発生確認の経過

平成28年９月上旬に、田辺市および串本町のニガウリにおいて本種と思われるカメムシが発生しているとの情報提供があった。同月中旬に現地調査を行い、田辺市（秋津町、稲成町、下万呂）、串本町（潮岬）で当該カメムシ成虫および幼虫の発生を認めた。成虫を採集して農林水産省神戸植物防疫所に同定を依頼したところ、アシビロヘリカメムシであることが確認された。

５．分布

アフリカ、インド、東南アジア、北部オーストラリア、台湾、太平洋諸島などの熱帯圏。国内では奄美大島以南の南西諸島に生息するが、平成16年に長崎県、平成25年に東京都（伊豆大島、母島）、本年７月に鹿児島県本土でも発生が確認されている。

６．形態

１）成虫の体長は17～25㎜。体は黒色で、前胸背の中央前方に三日月型をした橙色の帯があり、側角は鋭くとがる(写真ａ)。後脚は長大で脛節が葉状に広がっている。下面には多数の橙色斑がある（写真ｂ)。

２）幼虫は１～５齢を経過するが、４齢までは頭部・腹部が橙色、胸部・脚部などは黒褐色である(写真ｃ、ｄ)。

７．発生生態と被害

１）沖縄県ではニガウリ、キュウリ、ヘチマなどウリ類の重要害虫であり、ウンシュウミカンなどの柑橘類の果実も吸汁加害する。

２）沖縄県では、集団越冬した成虫が３月上旬に近隣のウリ科植物に移動する。成虫はここで繁殖して６月に新成虫が出現し、ウリ科の栽培植物に飛来して加害する。12月まで数回の発生を繰り返す。

３）成虫、幼虫とも口器を刺して植物の汁液を吸収する。成虫は、生育が進んだ果実の種子を好む。

４）ヘチマでは果実の吸汁痕の硬化が顕著で、吸汁部分周辺がコルク状になり食味を著しく損なう。ニガウリでは、果肉の内側から見ると吸汁痕がわかるが、食味に対する

影響は小さい。ニガウリの若い果実が本種に吸汁されると、肥大伸長が止まり黄色く変色する。発生密度が高くなると、茎葉への吸汁により茎葉や作物全体が萎れる。

８．防除対策

１）成虫や幼虫を見つけたら捕殺する。また，防虫網を設置して成虫の飛来を防ぐ。

２）各作物のカメムシ類に適用がある農薬を散布する。ニガウリのカメムシ類には平成28年10月１日現在、アディオン乳剤とトレボン乳剤が適用がある。農薬散布にあたっては、使用方法を遵守する。

３）収穫が終了したニガウリ、キュウリなどのウリ科植物を放置しない。

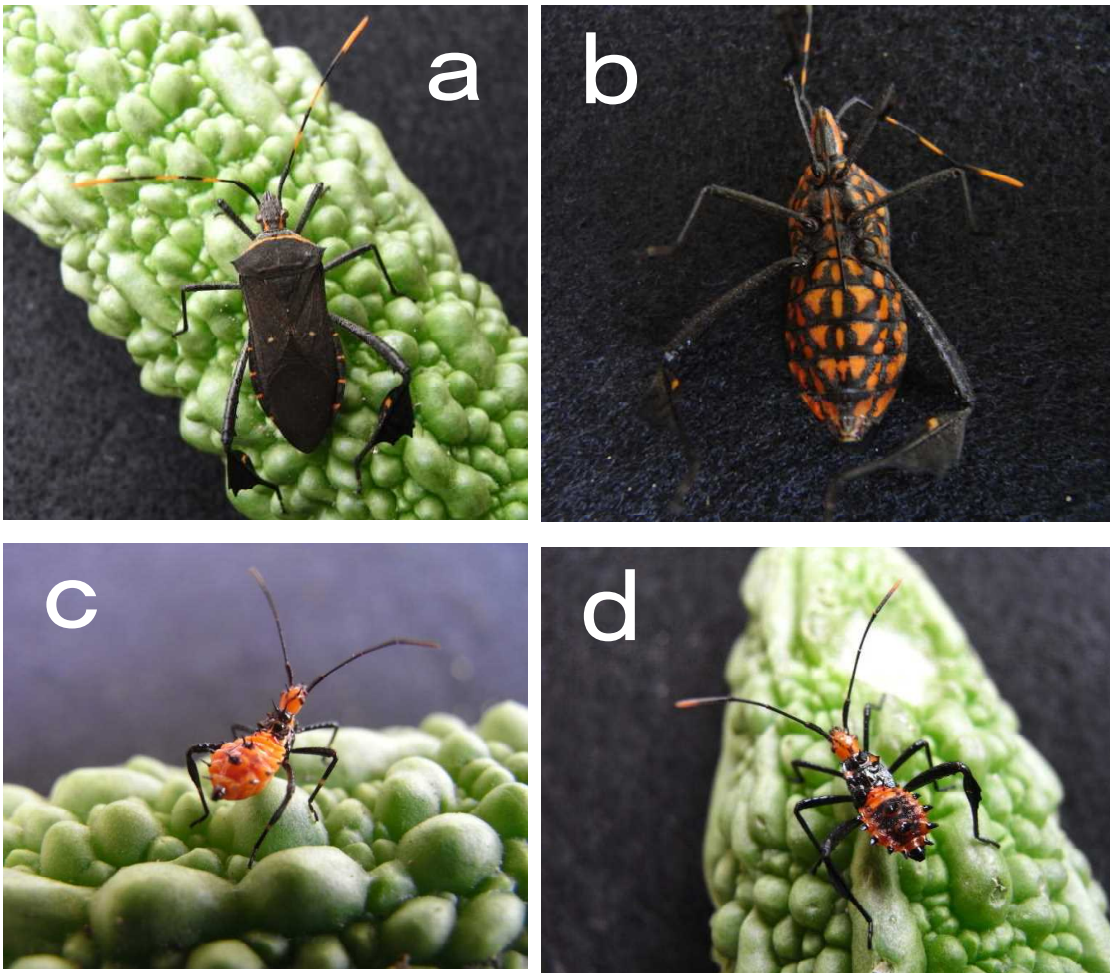

写真　　ａ：成虫（背面）、ｂ：成虫（腹面）、ｃ：若齢幼虫、ｄ：中齢幼虫

和歌山県農作物病害虫防除所
担当：井口・岡本
電話：0736(64)2300